

せなか

—親となつて思うこと—

中村美智子

我が子が二歳十か月になる頃、週に一度活動するある集団に、母子一緒に参加することにした。それは、家庭で母と子の縦の関係だけで一日のほとんどもを過ごすのではなく、同じ位の年の子どもたちがいるところで、横のつながりを無意識のうちに感じながら、次第に集団の一員として抵抗なく動けるようになってほしいということ、またそれ以上に、いたい我が子は、そういう集団の中にはいたら、どんな風に行動するのか見てみたいという気持ちをもったからである。

初めての日、彼はどんな感じでその場に臨み、あそんできたのだろう。おじけづいたり、頭から嫌がったりは全くしなかったが、何かオモチャを手にしても、本当に使っていないの自信がもてないで手に力がいらないなかったり、母の声かけを頼りに、母とのつながりを家にいる時よりも一層強く求め

ているようだった。他の人の誘いにも、そこに気に入った物があれば取りに近づくだけで、それ以外はほとんど無視。しかし、彼の目も口も嬉しきでいっぱいなのが私にはすぐ感じられた。何がそんなに嬉しいのだろう。回を重ねるうちに彼の嬉しきは落ち着きを加え、そここであそんでいる人たちの中で自分なりの位置を占めるようになった。この頃はおう、家を出る時から頭の中にしたいことがいっぱいつまり、つま先立ちをしているみたいだ。

彼がそうなってきたのと同じく、母である私も、彼を一步距離をおいて眺めるゆとりがもてるようになった。子どもは親の私物でないのは当然だが、理屈で知っていないながらも、実際赤ちゃんの時から接してきた態度には、愛育するのに自分の一部のようなところがあって、それ故にいらぬところどころでイライラしたり、疲れてしまったりもしていたことに気づか

された。子どもは親のせなかを見て育つと学んだり、実際そう思ったけれど、これまでの私の在り方では、子どもにせなかを見せる——子どもがせなかを見る——ゆとりさえなかったのではないかと反省するところが誠に多かった。

せなかでの教育は、親も子も気づかないうちになされていくのかもしれないが、それがよりよくできるには、親と子が一步離れた関係にあることが必要である。我が子しか眼中になく、あれよこれよといらぬ手をかけすぎているのでは、子どもはそのうち無気力になるか、後ろをむいたままになるかで、自分から後ろ姿の親に語りかけようとする態度は生まれ難い。そして本当は、子どもは親の知らぬ間に親のさまざまな姿を見、それを敏感に感じとっていくものだろう。また逆に言えば、そこに一番親としての子どもを育んでいく力があるのだと思う。

彼が集団の中で楽しくてたまらないといった様子であそんでいるのを見る時、私の側にも大きなゆとりが生まれていく。私も一緒にその集団の一員として加わっていて楽しく、家庭にいる時とは比較できないほど彼を一人の人間として見ている自分を発見する不思議さも感ずる。その時彼の言うことばや動き方に、私は日頃の自分の姿を思い知らされるので

ある。私は彼のせなかを見ている。それは、もうひとりの私が見せているようにも思われる。いつの間にか私も自分のせなかを子どもにさらしていたのかと気付くと、恥ずかしいような何とも言えぬ気持ちになった。

今までは学ぶ一方で、自分の後ろ姿など意識したこともほとんどなかったが、今、親となって嫌でも見られる側になると、あらためてその責任の重さを感じずにはいられない。親子のより良い関係をつくっていく、親子がよりよく生きていくために、真摯な気持ちで日々の生活を送りたいと思うし、そう思っただけで、ゆとりをもって自然とよりよい子どもとの関係が生まれていく。

せなかは、自分ではとても気付きにくい部分で、また他の人からは最も目にはいるその人全体といってもよいものである。あたたかみのある大きなせなかを子どもが感じてくれたら……、そんなせなかをもてるようになりたいと願う。そこに近づくために、子どもと一緒に経験もひとつひとつ大切に身にとり入れながら、親として大きな気持ちをいだいて、これからもっと楽しくつき合っていかなければと思う。